

第28回 郷土先賢室顕彰者紹介



幻の民謡「こきりこ」を再興した郷土史家

たかくわ けいしん
高桑 敬親 (1900~1981)

敬親は、明治33年(1900)11月、東砺波郡平村上梨(現南砺市上梨)に、高桑長松の長男として生まれた。高桑家は、上梨に代々続く円浄寺の住職の家系である。大正15年(1926)、富山県師範学校(現富山大学人間発達科学部)を卒業した敬親は、平村の東中江尋常小学校(現在は南砺市立上平小学校に統合)の訓導(現在の「教諭」となった。当時の敬親は、その風貌から子供たちに「栗頭」と呼ばれ、怒ると顔が真っ赤になる様子を「栗が弾けた!」と、怖がられていた。

昭和5年(1930)の夏、詩人西条八十が、民俗学者柳田國男から教えられた「こきりこ」の調査に平村を訪れた。西条が、柳田から教えられた「こきりこ」の一節を愛唱していることを知った敬親は、「こきりこ」が深い意味合いをもつ唄なのではないかと考え、独自に調査を始めることにした。しかし、村の古老たちを訪ね回り、7、8人の「こきりこ」を知る者に出会うものの、歌える者はいなかった。そうするうちに、上梨に住む山崎しいという女性にたどり着いた。彼女は、子供の頃に中屋の太助という老人から「コッケラコ」という唄を教えられたと話し、2本の煙管を打ち鳴らしながら歌ってくれた。こうして昭和9年(1934)、山崎しいから歌詞を採集し、「こきりこ」再興がはじまった。

昭和14年(1939)、敬親は、五箇山研究にあたっていた高岡高等商業学校(現富山大学経済学部)教授小寺廉吉と共に、雑誌『高志人』に「越中五箇山の民謡」という論文を発表した。その後、『飛騨人』にも発表し、これらの論文が、東京のNHKに勤めていた小寺融吉(廉吉の弟)に届けられると、昭和19年(1944)に「こきりこ」を録音する運びとなった。しかし、戦時下の厳しい統制のため中止となった。

「こきりこ」を後世に長く伝えたいという思いから、敬親は、昭和26年(1951)8月に「越中五箇山筑子唄保存会」を設立し、会長に就いた。その当時は、唄のみで踊りがなかった。教壇に立つ傍ら敬親は、古老からの聞き取りや古文書調査を行い、踊りや衣装の再現を急いだ。上梨出身の永森そよが「右足出して、左足出して、くるりと回って、二足流して、三足歩いて、くるりと回って手を打つ」と語った動きが唄に合致したことから、これを基に踊りを定めることができた。そして、昭和28年(1953)年5月10日、上梨白山宮の建立450年祭に「こきりこ」を奉納する運びになった。翌年5月には、富山産業大博覧会において「こきりこ」を披露した。その後、全国各地のイベントに多数出演し、「こきりこ」が広く知られることとなった。

「こきりこ」の再興に努める傍ら、敬親は五箇山の民謡、歴史や地誌、産業、民俗や方言、伝説、合掌造り等の調査研究を手掛け、数々の論文を発表した。その功績が評価され、昭和39年(1964)11月に、県政功労者として表彰された。

昭和52年(1977)、『平村史』の編纂委員の一人に指名された敬親は、村史刊行に向けて精力的に活動したが、昭和56年(1981)11月21日に、村史の完成を待たずに病没した。

<専門員 松田 啓宏>

平成30年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



国際的な感覚を備えた芥川賞作家

ほった よしえ
堀田 善衛 (1897~1988)

射水郡伏木町(現高岡市)で廻船問屋を営む堀田勝文、くへの三男として生まれた。

昭和6年(1931)3月、伏木尋常小学校を卒業後、石川県立金沢第二中学校に入学した。昭和14年(1939)4月、慶應義塾大学法学部政治学科に入学、翌年には文学部仏文科に転科した。大学時代、伊集院清三との出会いをきっかけに『批評』の同人となり、詩を書き活躍した。

上海で終戦を迎え、昭和22年(1947)1月に中国から帰国後、昭和26年(1951)まで多数の作品を発表した。昭和26年(1951)には、「廣場の孤獨」「漢奸」で芥川賞を受賞する。

昭和52年(1977)5月、スペインへ移住し、昭和62年(1987)12月までの約11年間スペイン滞在した。この間、画家ゴヤの長編伝記『ゴヤ』四部作を完成させ、第4回大佛次郎賞を受賞する。

平成6年(1994)、高岡名誉市民となり、平成7年(1995)には長年の文学的業績により朝日賞を受賞。平成10年(1998)3月、日本藝術院賞を受賞した。同年9月5日、脳梗塞により死去。享年80歳。

<専門員 松本 純>